

こゝで於鶴に会え夫が、おの子が於鶴の子であると知つた時は、合戦よりもぞつとしたわい。今思い出して、も寒気がする。」

秀吉はこう言つて首をすくめた。それから秀吉は、小者で言つて馬の玩具を持ってこさせた。

「高次殿。これはあの時の詫びじや。勘八郎への土産にしてくれ。」

差し出した玩具は、木彫りの巧妙な馬だ駒であつた。

「勘八郎め、果報者でございます。」

高次は有難く頂戴した。

「高次殿。一度死んだ人間じや。勘八郎、大物になるぞ。」

「それであればよろしゆうございますか……」

高次は嬉しそうにその場を立ち去つたが、すぐに於鶴や勘八郎に会いたかつた。

報告記

中国訪問記 (第三回)

—主として歴史的分野について—

会員 古藤 田 太

(外生所大宮江良)

(五) 大運河

私達は、いよいよ蘇州を訪ねる日が来た。宿舎は、南京ホテルであつた。

朝早く散策してみると、淡い霧の中に、サンゴジユヘ

拜期(と)タイサンボク(へ)泰山(山)が多い。

古くから日本人に親しまれた蘇州は、水の都と聞いていたが、水が濁っているので、水の都と云うのは、イメージが違ふようである。それで、水路が発達して、小舟が家々の裏脊戸まで入つて行く所が多い。

ここ蘇州には、七世紀の初め(紀元六〇一年)から、大運河が通っている。所によつて運河の名称は七がうが、杭州を穿した運河は、太湖のほとり蘇州を経て、揚州や幾つかの湖を抜けて北京に達する。延々千七百九十四キロ及び、万里の長城と並ぶ世界の土木工事であつた。

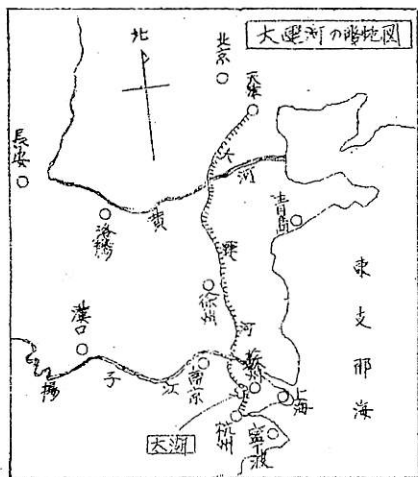
一九五八年(日本昭和三十三年)、人民公社の設立促進が党中央で決定されて、中国の大躍進が始まると、それに促されて、大運河の本格的な改修工事が始まられた。農業の振興その他、華北地帯に水を送る、いわゆる南水北流または南の食糧を北に調達する、南糧北調といわれる計画に副うものである。

現在の江北大運河は、幅最小二百メートル、最大五百メートル、水深七メートル、優に千トまでの船が航行できるものと成り、

古代以来の面目を一新したものであるが、蘇州の付近は、このように大きなものではない。

この大運河は、隋の煬帝の時に開闢されたもので、隋は、僅かに四

〇年の短命王朝で



あったが、運河の開通はうけつがれ、以後の中国王朝の
経済上・交通上の基礎をきずいたわけである。

この外、この大運河が果たしたもう一つの役割は、日
中文化交流の道となったことである。唐に渡った空海や
留學僧も寧波に上陸した。遣唐使達も、玄宗皇帝の知遇
を得た阿倍仲登も、蘇州を通って洛陽に至り、更に陸行
して都長安(今の西安)に急ぐ。南船北馬とは、いみじき表
現である。江南の旅は船に頼るしかない。「最後の遣唐
使」(佐伯有清著)によると、運河を行く当時、有祿は、
二つの船を横につないで船船とし、四十余の船般を、二
頭の水牛で牽いて進む。辛苦に及ぶた、長い、長安への
旅であったことが記されている。

この古い、歴史の大運河を渡り、河一杯の小舟が右往
左往しながら混雑を呈しているのを見ると、私は飛鳥の
昔に連れ戻されたような幻想におちいる。

(六) 寒山寺

蘇州楓橋鎮にある寒山寺は、意外に平坦な街のはずれ
にあった。寒山寺が低い所にあったことは、私達の共通
した驚きであった。有名な寒山寺詩の鐘聲が、高いとこ
ろから響せらるるものと思ひこんでいた為であらうか。

そこには萌黄色の大壁に「古寒山寺」と大書してあっ
た。中にははいつて行くと、無住の寺ではあるが、文物管
理処(注)日本文化庁に相当する)の手で、美しく清掃されてあ
った。幾や建物は、長い歴史を偲はせる程の古色さどど
めている。

先ず服にへいたのが、阿彌陀如来像で、高く安置され
て、ピカピカ金色に輝いていた。この数刻は聳然天が
こらまた美しい装いで、金網彫りの中に立っていた。こ
小暗い隅の方に、やや小さい釣鐘が吊ってあった。こ

れは読者の皆さんに、この鐘のことをしばらく覚えてお
いて貰ねばならない。

別棟に、中国独特の奇相さを示す、反りの深い建物か
あったが、これが鐘樓であった。鐘を内側からのぞくと、
大きく破れて、見るに痛ましいものであった。榑木は
かい粗末なもので、日本や韓国に鐘に比べると、格段に
拙劣なもののよう思われた。唐代には、ここから打鳴ら
す鐘聲は、日本からの旅人の心を捉えたものであろう。
現在懸っている鐘は、宣統三年(清朝最後の年)に
わが明治三十四年に造られたものである。

鐘樓を降りて内庭にまわると、狭い空地に二基の石碑
が建てられている。一つは寒山寺碑である。私達が平素
お目にかかると寒山寺詩は、この碑石の拓本である。

月落烏啼霜滿天
江楓漁火對愁眠
胡蘇城外寒山寺
夜半鐘聲到客船

上掲が寒山寺詩、盛唐の詩人
張継の作で、楓橋夜泊と題している
案内の通訳先生は、「これは
一説であるが、(と前置きして)こ
こ蘇州には烏啼山とか、愁眠橋と
いうのが実在するから、この寒山寺詩は、一月は烏啼に
落ち、一と読むべきである」と説明していた。

今一つの碑石は、次のようにある。(原文を漢文)
鐘聲已渡海雲の東
冷々吹寒山古寺の風
豊干として又饒舌せしむる勿れ
化人再び到らば、空、空ならず (化人は信者)

(海雲の東は日本をさす)
(風は情景)
(豊干は人名)
寒山寺の釣鐘を日本人は持ち去られたので、寒山寺の
情景が、美しい聞き心れてしまっていたが、新しい鐘が
できて、この寺の信者が何時訪れても、よろしくなっ
たという、その新鐘記念の碑である。

往時は、戦争の場合、或戦側が釣鐘を持去ることが多かった。釣鐘こそ戦勝記念にふさわしいものであったようである。

七世紀の百濟滅亡の日(六六三年八月)、百濟の釣鐘は、唐や新羅軍によって、ことごとく持ち去られたのである。いつたい寒山寺の鐘は、いつの日にも持ち去られたものか、知る由もないが、盛唐の頃から日本人に親しまれた寒山寺の鐘が、日本人に持ち去られた話を聞いた伊藤博文は、山田寒山なる人をして、日本国内を隈なく探査させたが、遂に鐘の行方はわからなかった。そこで博文は新友に釣鐘を銜させ、先程皆さんに記憶してもらっていた釣鐘を明治三十八年四月、この寒山寺に贈ったものである。鐘にあっては釣鐘が、詩碑にある新鐘である。

では、伊藤博文公の贈った鐘は何故使用されなかつたか、小型であるためか、別に不利用の理由があるものか不明である。いざこれにして、釣鐘を持去った日本人の愚行を、嘲笑しつづける寒山寺の鐘は、客船ならぬ、この寒山寺を訪ねる旅人には、「日中友好とはなにか」と、訴えつづけることである。

(七) 中国旅行記の終りに

昨年(一九七八年)八月十二日、日中友好条約が調印されて、私達土膚で感ずる程、日中間がなやかな友好ムードに包まれるようになったことは、真に嬉しいことだ。中国というものを、日本人として知らぬ風にならぬ。また、理解していきたいと希望を持って私は中国を訪れた。これからは、当然、中国を訪れる人が、限り無く増加していくだろう。私の中国訪問記も「山鳥の尾のしだり尾の」長々と書きつづけることをこの辺で遠慮して、他人に譲ることにはしない。

最後に、私のメモ帳に、何気なく書き留めてあったものを披露して、欄筆したい。

① 北京の太和殿に大書してあった毛首帝の言葉

「人民、ただ人民のみが、世界の歴史を創造する原動力である。」

② 「人民中国」の雑誌に

「あの地下壕が、実際に使われる事態にすれば、日本に波及しないわけにはいかないだろう」

「地下壕の長さ、いりくんだ綱の目のような複雑な構造を、こつこつと、手で造りあげてゆく」

③ 「女兵足の半分を支える」

南京取で私の目の前、大きな機関車が止った。するとぞろぞろと、女兵の襪履車が玉屑降りて来た。中国では女が、男と全く同じ仕事をしている。

④ 中国は、日本人の生活に比べて、すべてが貧しい、低いというが、それは、無駄なものがない、無いらしい生活で、そのよって立つところは、実に正しい方向に線が引かれている。

⑤ 中国では「政治こそすべての中心であり、文化も教育も、政治と密接に結びついている」というように、政治に奉仕するものでなければならぬといふとされていゝ。

(おわり)

石鏡の嶺白々と春の雪(吉祥寺(の車中))
香栗も葉経きくわが膝の冷え(善通寺)
春雨とききつづける朝餉かな(靈山寺)